



崑山集
十三



利5
1979
/2



1979
12

嵐山集卷第十三

冬部

雪

あまの神の大地や雪佛

さじくちひよかあさり

ひくちひよかあさり雪

史徒肉の修ひりきまや高山

高山とあらからくる高山の山

夜よらとあらぬちきや孫の山



八

雪あんなにたまねんこも白乳
餅雪ふらふこと付ら木履水
土くれの雪道くろく鳩の杖
海まゝ家あふあやうのこ綿
雪ふあう心折やうあう
踏らぬ人のいひんよまう
流すくよふかきあんなの粉雪
面と気やまうう折の雪

うき木もや花咲かすのら雪
綿針と包心のゆきあま
長祿も目つけてとらる雪は
山姥の餅たされや木々の雪
山窓よりあつた雪や清は
餅雪のあつた雪ふ出よ日の嵐
たつた八折そく
佐保路をうきこひる雪あつた

繁をさくして餅雪うらつ栲木
 餅雪や木の葉も包むさく
 ちり雪と葉叶あつとらん
 為雪の銀や地も踏る山
 わし雪の白葉や川かた坪の
 あらふかの山のあまの雪若
 藪と川雪の垣をなふ小付外
 為雪の山眉作りけ志やう外
 虫佐踏も皆あつらん此の
 海くみ雪やあつみのせうの餅
 ちり雪や男松女松たりあつ
 篠の葉と風舟吹まけ雪ち
 雪乃花を今朝の白ふや香炉
 枝の葉さく雪然わつる白
 為雪の栲木の雪や餅さく
 栲木の葉を葉白さ今朝の雪

凡山の雪は白くみの鏡は
一よりいふ多きは致さぬ雪女
ゆり雪も松もつじや云極
山は此わくちの白くみこれ雪
綿く似く流くいさ雪はぬ
むく雪の髪は正水のかうニミヤカ
あゝ雪は源氏のともいふ八幡山
冬道や足くくひゆりう雪

雪折とさるまことちる雪折
富士がしの餅雪うくく雪折
富士や雪をささまて似てひきの
姫松の白くみわねくみん山
わまさりて流るる雪也白くみ
折別や雪の白くみん松の雪
折くくもわんくも松の雪
弁舌とるまきく雪の白くみ

雪の雪舟のつれづれ
雪舟の雪舟のつれづれ
雪舟の雪舟のつれづれ
雪舟の雪舟のつれづれ

雪の報社送のひととなく

舟航やこぎて通る雪舟
木舟餅のなるやうに松の雪
むす綿の山懐のと朝のゆき

雪舟の雪舟のつれづれ

舟の雪舟のつれづれ

大ひえやとむゆの雪舟

雪舟の雪舟のつれづれ

ちりちり雪舟のつれづれ

雪舟の雪舟のつれづれ

あつち雪舟のつれづれ

あつち雪舟のつれづれ

あつち雪舟のつれづれ

うらうらひ白蛇なすゆいさ女
 雪積ら本をそあぢあひ八もよ
 築垣の雪や其まうたな
 幾年をまこころ袖の雪女
 枝を紫も何そあぢあひ雪女
 淡雪や流まてまひく礼
 二日うらうらひ雪やうら
 日中や雪のわらあひ唐の土

うらうらひもらうま、
 白蟻もやまふあぢあひ雪女
 雪女の涙とさあぢあひ
 雪女へ南の枝やまこころ
 海つじやま六尺の雪佛
 多しけあぢあひる雪女
 足うらひのあぢあひる雪女
 雪女もまこころあぢあひる雪女

冬来ても粉雪とまふと松

雷綿のくくく竹やはり竿

なまふとら目そつてけく雪の松

水山と只雪花のうく雪の

白雪のうくじや松乃益杖

餅雪のうくもして成木を

矢の折へとも雪の

雪花を木の絲雪の

風の勢をうくせら物や松の雪

下これ足をとくぬや雪花

雪の折なり橋から川を

雪花をうく雪のうく物雪

しう折へとも雪をうく

若の上も積まら雪や巻綿

目の折やめめ目の雪女

雪色や女海と三橋の山

つまなくつとゆとへし女の雪女

玉地ろく冬涼雪ちるこ園の

柳の本も溶つる雪や御出所

詩作つそそるや東坡の所の

是れも溶くくひせとちるこ雪

くくゆきへ月らと雪もあはし

雪を結くまきも人君位の

大雪や天下一すひの花

雪の松枝や子年と雪の字

くきとくうふくうむじ松のゆき

わきの串や白ふへ染れ雪は花

そひららへりりわりも雪の友

大雪の目へ鐘もあつたか

溶雪とくくくや中つるり

縁やうきへくくへ起よ雪は折

雪花や冬水窓の雪ころ

良遊

自勝

保友

紫房

雪和

一氣

元与

同

加友

一元

同

良和

長須

利重

右後何托

晴夜本

松山

丹波福知内

うま

舞台

字

住持松枝位

松列南田松年

名引津島

姫湯吉田の兵

目録のせむをあらき雪や静夜

ちくと路に雪へ天降るとわわ

田中少りしとひく雪やう孫ナラシ嫌

えんえんのまわふ山やつまの雪

人をあつて能借とらや雪舟

雪道にふりあわなぬ約り也

つとよやけえそつらあな合各ゆき

わきやのそん惟子雪と法良の

筒舟花といくら心そ竹の雪

横波ゆきわへ雪あつと期外

まふ程をひくくや雪は花白

急よりとまかあ候わつと此松の雪

雪の三様をきわら綿かりし

けふのの雪や幣帛と向山

ゆくつとる雪や共いころか男松

る雪や地々思本のかけく雪や雪

孝人泰平

明白

伊賀上野任

一之

姫湯

之富

左任

舎成

轉黄

元辰

孝尔

政純

大坂

貞貞

純別

治忠

孝任

政泰

孝任

則康

清任

正俊

梅別位

孝順

新州

正貴

高津

左勝

右任

宗直

徳の聖

正直

東寺けくろわぬ糸此と物
是もよわ日とてると今朝
花咲ぬ木や船とく雪枝
少らきころひる雪やゆ
雪花も雪のう木の花
浮ぬくまくとよ雪花
有馬山より雪や湯惟子

みんわいすら音めく

みん妻の虫の火めら雪花
枝多りく雪の花も池の松
雪と花とりよとてと
雪をうて雪糸の竹や雪花
鳥の羽もよゆ枝の雪花
誰之皆目をらりく雪花
重なるもや枝のけ雪花
んと雪と雪へ竹りく

尾列久松

政辰

右

津国

酒石

華公

忠昌

貞剛

伊人

後貞

月

梅盛

定通

宗海

富好

忠之

正重

貞次

芭蕉美の雪のち北の麩

名後度思は也
定房

霧の海よりとくても雪は山

日
名後國府守の母

のせ山雪のりくもりあひ

政吹

初雪や菊より後のちか昌

道長

今日入とあひよりんより庭

利政

さゆわく虫のくさる雪のりこ

保入

ゆく孫花のうらうらんは粉雪

季貞

雪消々うらと火とあると天氣亦

政信

雪よれの竹へ白衣はしせに

正信

枯木まて花地まより雪は芥

方淑

園中ゆら雪や月夜の人ほり

重次

しりとあひ起くうらひや竹の

吾治

王あつて深雪の道や玉を玉

宗保

雪ちまよひをこもる雪の利性

宗保

雪へは雪外くわをわりけり

不存

大井川より雪は流しを

不存

一海くもみ 猶まゝも雪の白
あつらふともや乞ハ涼雪は花車
雪花や乞るん 芳野の山極
よの久れはくめや雪母無久男
袖ぬきそ 惟子雪とあかりも
雪花を吹く一のたんのふ
月光のそくくつふぬ 庭は雪

勝尾寺ゆく

月新母雪のあつらふ勝尾
字わくらもや弁の中山まの
十八の公乃あつらふ松の雪
雪は涼はもく酒も壺は内
白酒の流介の内もら涼の雪
雪の綿つむむ庭三把志つ松
積雪山くくつふや雪の友
雪はらんこくもみくもみ

中川

多良

大坂井上

正和

右衛門

明高

赤松

雪平

教皇

正徳

赤田

自伝

正五

喜道

守七

将兵

伊大井

自伝

同

平田

同

良次

原田

自伝

孝之長子了生

雪ふくむくも子やたのり

雪

後

方成

雪ふくむくも子やたのり

藤名

南林法名

幾成

雪ふくむくも子やたのり

式

妻之新七

定之

雪ふくむくも子やたのり

直孝

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

雪ふくむくも子やたのり

信元

きりふの雪やさきうらうらけり
雪や天女花咲地女身全事

謡曲

けの雪もあけ風のまき子か
し字きりけり雪にけり
年きりわだの夜に雪
雪けりけりけりけり
歌のいもけりけり

三十三

清原

舞

清之

新

正勝

玄樞

重次

玄母

光与

餅雪

餅雪と包こりてあはれ
遠若雪のむし

勝重

餅雪いりりやけのまけり

良保

餅雪ふゆくをらんぬ敷り
吉飯ゆく雪と

安の

可廣

餅雪や目女一の吉飯ゆんこ

傳

伝元

新雪やゆふの斗大原野
餅雪の川の祝ひの娘小妻

雪女

雪女はあつたかきとそふ雪どか
積ふら水もわらうん雪女
雪女月の夜もわらふ山
雪女ええやうもわらう瓶綿
ゆりゆりそわじとめりゆ雪女

新 清玄

貞 母

雪 幾成

一井

外大

伝元

定通

長昌

幸以

心合

徳昌

友三

繁穂

貞利

定房

雪女の化生道具の水面鏡
ゆりゆりそわじとめりゆ雪女
月舟見ぬゆりの鬼の雪女
夜子の森やうり神の雪どか
雪女そわじとめりゆ雪女
ひまの川のあやのこころも雪女
軒の素やゆりのよのゆき女
大森女ゆりゆきとけりゆ雪女

雪のりも落やこころ雪とんち

中内御女

貞旦

天女のこころめえよく次ゆき女

名

夕時

そこのは雪女りやあつらうと

道玄

女なるそて雪や梅本増ひいあ

此所抄川

名成

あつら雪の女あや姫子すし

雪女とてあつら

方成

雪佛

水神もあ波乃あそそ雪佛

名

梅盛

あつら雪の女あや姫子すし

未得

あつら雪の女あや姫子すし

保成

あつら雪の女あや姫子すし

名成

あつら雪の女あや姫子すし

名成

あつら雪の女あや姫子すし

名成

あつら雪の女あや姫子すし

名成

あつら雪の女あや姫子すし

名成

あつら雪の女あや姫子すし

名成

あつら雪の女あや姫子すし

名成

あつら雪の女あや姫子すし

名成

雪佛多三人竊のころや
葛物と一狩母作き雪佛
浮る川じる佛とや雪かきけ
清水や枯木花さく雪かきけ
あまを冬そほく念仏の雪佛
ふ佛坐禪のかもらふと雪
雪山の童子や恵母ゆき佛
作る神とわらふこの冬や雪佛

上の花

芦原舟流やち干し川の花
あかしの海母塩をくちや六のむ
はじと書飯ふく引よ六花
六の花わきそ積ふは二ゆき
三笠山や三國母かろん六のむ
八重花はさくはちらわ六花
しんくの花はさくはちらわ十二月

三十一

月
東三盛三

英茂

日六

房成

揚津

舟易

高野

正安

尾刈

舟力

泉の海

舟門

比村

恵徳

船泊國守

政次

主右

送長

娘の音

利実

友

右時

晴信

久知

名無

字重

尾刈

重徳

新定古今

霜天舟三の雪川い流の六の花

雪川

枝のさねとく生さう六乃ちか

雪川
乃伝

冬は寒ふさるわめ音の六は花

乃伝

七回の進呈

唱ふ字わ六の花もり七田忌

乃伝
良直

浮天やあふし時かそ六の花

源六宗の奇めく

保太

少り奪わる身めそは梅の六は花

保太

花のころ由去年意初ても六の

梅麻

つらつめわつらつら六乃ち

良直

かつとわさく六の花形や少り歌

良直

雪わあふ梅和琴は糸の六は花

良直

とせとあめ少くせくころも

良直

あふとんと新の本はく人歌の

良直

よそあめころつとせく雪三

良直

解雪やあふあふのんさじ

良直

雪うららあめせとわは花ひ

良直

雪とれく天うらさかこや一せ雲
 雪女はやまのこの一は比花
 月花もさけさきしてや雪女
 ちの焼りよあつじと焼りの雪女
 空地さく若ぬつらりよ雪女
 わの雪つらうらぬ焼りの雪女
 町の雪つらやあはまの雪女の舎
 じり雪つらやあはまの雪女の舎
 海さくつらやあはまの雪女の舎

西の舟形奇唯如上人矣

海ふた

御門はあうらうらうらゆさ
 武彦野をまきまきつらるる雪女
 の雪女あわのくたう好く雪女
 あうらあわの焼りゆさの雪女
 雪女はあうらあわの雪女

富吉山お庭の雪ふりりし

根おほりら雪や来去の枝の記

雪おの折といふはと教らじし

年つひやうと神慶まじり雪

雪お此まうとひもるま枯木お

周備の侍元のこめおこか

つらも真おれお舎お

まわりまきつらせぬ雪もまじり松

半家武志おまうと踏られたの

序地おおままうと雪を松葉お

二条とてむらぬおめく

おねお折とこひら雪とらうと

雪おゆきと踏つらめくはるの

山もまうとあま雪とらうと

山姫の初折おらひも初雪

大雪おあうとあまおこいし

此所記人よりともか今報の

寒

栲津吹田めく

風さけちりく志也成る地
りく風ら乞の申せそ寒水
寒さ東の身ハ海をさちら
るるるるるるるるるるる

畏部めく

寒さ東めあつらく人さ
大松の松をさしーら
冬されり誠なるるるる
寒さ東めあつらく人さ
此風の寒さめあつらく
寒さめあつらく人さ
寒さめあつらく人さ
海老めあつらく人さ

舟橋町
道如見
小舟橋
心決

空を凌ぐとてお僧の頼中冬を此

寒と頼中冬を凌ぐとてお僧の頼中

空を凌ぐとてお僧の頼中冬を此

空を凌ぐとてお僧の頼中冬を此

空を凌ぐとてお僧の頼中冬を此

空を凌ぐとてお僧の頼中冬を此

空を凌ぐとてお僧の頼中冬を此

空を凌ぐとてお僧の頼中冬を此

空を凌ぐとてお僧の頼中冬を此

埋火

火の火をいふお僧の頼中冬を此

火の火をいふお僧の頼中冬を此

火の火をいふお僧の頼中冬を此

火の火をいふお僧の頼中冬を此

火の火をいふお僧の頼中冬を此

火の火をいふお僧の頼中冬を此

友成

政正

重紀

宗辰

元勝

長頼

長頼

長頼

長頼

長者もや多き久し玉池田炭

かゝる種は伊り此方らや物炭

埋火母あつらやゆふのまじわふ

あつと移るも肌いゆらさぬ火桶

まやこさる炭とここのむか

釜あけて火母あつらやゆふ

せうもあつらや焼く火桶のまじ

あつらやせうもあつらや焼く火桶

埋火もかつあつこのむか

焼く火の釜もあつらやゆふ

釜もあつらやゆふ釜の湯か

車切母せよ燭燧の小野此炭

せうと焼く少ゆふあつら火桶

足もあつらやせうもあつら

罪もあつらやせうもあつら

行ふあつらやせうもあつら

貞宣

日

日

友三

友宣

安行

安助

政伝

上巻

白炭や黒炭もそのつらくな
んを足とわくのちるわたる
煙火のあつとけつわと毛猫
伊ろつちめやちとと火籠いり
炭よりとらんてあつちやち
空ま集のち肌をばとと

遊善

あとのいとととみかちるけつと

あとのいとととみかちるけつと

火のつととととととととと

救急のちととと

茶のつととととととととと

ちのつととととととととと

白炭のつとととととととと

白炭のつとととととととと

月

善

月

時

善

良

色

重

心

良

宗

宗

昌

信

あり八交並ハ流ワ炭火水

友右

次良

福ナラハワラ火燧や三ノ

貞利

とて川の急水ありいさ

猫の福ナラトノ子

能うおゆふふとみく

三友右

元昭

福ナラハトゆらこあ

出の中お是や火燧

貞統

長つまや炭と薪の火

貞成

是の福之の車やま

友右

貞好

煤火の花極るれや

江守

貞実

引くもくまひら

江守

貞光

灰も人すらわ

手抄

貞久

木の炭も成る二

紀別

貞保

まきもい内へ

紀別

貞政

白炭いやく

手

貞和

牛もあそく

橋山

貞友

新井 氏

孫らも火粒の老の秘録

滑る火乃あしく炭や益瓶

わすらるる風しきおと火桶

名のよひせつらむおさわ

ぬきおのりけるおのり

ふきおしとらふとらふ

夏おれ 雲はとけふより

おのり炭重き火桶

炭電

白粉もく炭電の雲は

すまう海らく山焼の火桶

はかばかきくおと

炭もやまの焼の炭

炭電らわくじわ小

富士のきり炭電

川

冊

愚杖

安部

長瀬

月

こ こと こと こと

岩

安明

岩

正吉

岩

政信

岩

善次

る網とすすむはなをいふ體

自叙

水鳥

りる此處に身をまぐさるゝ
 雲のくもをひらきまはるゝ
 海をまぎるゝちちをいふ
 しのぶのくもをひらきまはるゝ
 雲のくもをひらきまはるゝ
 海をまぎるゝちちをいふ
 しのぶのくもをひらきまはるゝ

海をまぎるゝちちをいふ
 しのぶのくもをひらきまはるゝ
 雲のくもをひらきまはるゝ
 海をまぎるゝちちをいふ
 しのぶのくもをひらきまはるゝ
 雲のくもをひらきまはるゝ
 海をまぎるゝちちをいふ
 しのぶのくもをひらきまはるゝ

法連よりてそふ庭をむくを子

水かき入る久酔しりりりりり

波うそつ暮をやまらん淡子鳥

海風をそそと申よしな子鳥

九百九十九時をよのよ子鳥

是よりりりりりりりりりりり

同く暮ふ啼りりりりりりり

白鷺とたつ子鳥乃る鳥子

水鳥のうく時常やとのり床

あを此きそめり時やら此拍

和歌の浦かき入るぬ時の子鳥

舟楫かき入るゆ生時の子鳥

あし流をそそ子と程の時鳥

海をこゆとらや八丈の時鳥

波のうねりたて横ゆり時鳥

まこる人かき入る時鳥

林山 成守

聖次 永吉

林 久勝

佛師 正勝

大津 如貞

留 公別

岸 物吉

了善寺 久能

波のうらさきさうらさき酒らさき

信

政信

琴の酒の友らさき酒らさき

國

友之

一匹のひまや海風の浦さき

了壽

久氣

双葉乃魚もやうさきの浦さき

有若

自利

甲んころふぢうも松浦さき

信右

政信

あまのさころふさき一匹松さき

有若

春藏

やきさふさきれむこの漢さき

有若

正次

うらさき酒のさき酒らさき

有若

貞利

あまのさき酒のさき酒らさき

有若

定之

酒後の船窓初めくさき

よ

有若

感徳

増さあさき酒のさき酒らさき

有若

友之

雑の酒のさき酒のさき

有若

政信

帰あさき酒のさき酒らさき

有若

英辰

子馬は酒のさき酒らさき

七

正次

おのゝ足乃脚車とあふれはるる
 足揃ふよしむあふれはるる
 指舟よさふあふれはるる
 當らりの流せはるる
 後を江の月やじしはるる
 切き沖舟のちるるはるる
 短きとれはるる鴨のわ
 いまの鴨も波あはるる

系 元親
竹内 一系
正 正知
舟 舟加
榮 一治
了事 一系
伊波 正實
了事 久義

生あつ鴨の毛やさのあつ
 押ふあつ鴨の毛やさのあつ
 鴨の毛やさのあつ
 空あつ鴨の毛やさのあつ

系 梅盛
豊 友三
梅 保友
書 寸川

濱田福也

村まそや河のまそはるる
 海まそはるる鴨
 芥りまそはるる鴨も鳥甲

系 友我
 寸川
 月

鴉もまひる波のちかから
 海原ゆえに小鴨うちあふ
 鴨もそつり田鶴さつりはあ
 水かきくいのち原の好い
 ちいさうらひのちと鴨のあつた
 池かたさう鴨の親子あつた
 こゝちせしとうはえはせ鴨は
 雛のあつた鴨は汁やえはけ

鳥 月
鳥 稚鷹
鳥 之鳥
鳥 鶯
鳥 一角
鳥 自貢
鳥 信鳥
鳥 未時

鴉鴨の香炉の池乃水烟
 鴉鴨のゆすまわ鴨の煙は
 いちすの池いよぬと此念
 鳥肌もあつたまらうの志
 ちいさくはとあつたまらう
 鴉鴨のゆすまわ鴨の煙は

鳥 一宮
鳥 正賢
鳥 久壽
鳥 不存
鳥 玄徳
鳥 定房

芝のまはる鴉鴨のゆすまわ鴨の煙は
 系
 友我

水もろしと流るる昔もし 中 貞吉

わらぬの昔も 温 月

野の昔も 谷 彦也

と昔も 岸 安朗

鴉の昔も 弁 忠孝

鳥の昔も 弁 美吉

我も 長 長飛

半家 月

風中 こ

流 こ

影 こ

影 こ

子 こ

彦 こ

影 こ

影 こ

江付 砂也 愛あくる 志のあ
御好七 久き ぬより 一の 繫糸

鶴 付 将

鶴より とも 食ひの 腹あめ 鶴
ちし ころの こと の 川 舟の 桂燈
洞垂く ちよ 好より 一と 一と 一と
大なる ぶの ちよ ちよ ちよ ちよ
大なる わの くら ちよ ちよ ちよ ちよ

季 吟

鶴より ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
人の ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
寂滅の 鐘も ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

西村 貞次 政次 茂成 昌高 正長
中村 貞吉 春 浦 矢田 高
浦 貞利 貞成

廿三 廿四

神也新也のほせて神也
 浪の勢ふいかにうり御子の深
 浮揚し怒りあうしおし御神よ
 のりかの勢も海女ののりか
 ちもあつちも神代もく神代
 日んりくゆりまをく流湯
 又のりくよ射也のりく海原
 ころりも射倉れいのころり
 倉 留 藪 島 島 島
 長 正 貞 三 武 政 元

神也とくさこの本うたぬ新事
 冬の新也誰もくくの流し
 海原もいらくの海原も海原
 〃 〃 月

佛名

喝へりち新也出入見佛
 ころりへり佛の新也此敵の
 新也
 新也すり日新也軍もらり
 〃 〃

乃かうらむをわらむらうら
乃乃子もやと八さき十月
孫らわらむや此さ
乃かまらむ入子のさ
乃乃のまささ七百八さき
乃乃のまありくむもさ
乃乃のまらむもさ

節分

二月
長瀬
長勝
良和
政信

乃乃の格をわきそて冬
鬼はそし後らうらての
乃乃乃もあまえはら
乃乃乃もあまえはら
乃乃乃もあまえはら
乃乃乃もあまえはら
乃乃乃もあまえはら
乃乃乃もあまえはら
乃乃乃もあまえはら
乃乃乃もあまえはら
乃乃乃もあまえはら

極片

圓房

牛乳の大豆とあてふ大豆の粉
前分大豆とあてふ大豆の粉
大豆と大豆とあてふ大豆の粉

蓄

大豆

大豆研み入る大豆とお

大豆

大豆と大豆とあてふ大豆の粉
大豆と大豆とあてふ大豆の粉
大豆と大豆とあてふ大豆の粉

蓄

大豆

大豆と大豆とあてふ大豆の粉

中川

大豆

大豆と大豆とあてふ大豆の粉

蓄

大豆

大豆と大豆とあてふ大豆の粉

蓄

大豆

大豆と大豆とあてふ大豆の粉

蓄

大豆

大豆と大豆とあてふ大豆の粉

蓄

大豆

大豆と大豆とあてふ大豆の粉

蓄

大豆

大豆と大豆とあてふ大豆の粉

大豆と大豆とあてふ大豆の粉

大豆

銀座めく

節分のまら板ちんたあ〜

年同立ま

年乃ららぬまじまじ

ままのまらり〜

くまの年此らら〜

年の内ままらら〜

年此らら〜

即承 歳

あ〜社のまもら〜

一袋

酉の年の内ままら

けり日

まもら〜

未

雑冬

あ〜

す〜

同

くさるくおみまの磨か
わのりく目くまらふい
く家風おと守方磨く
くくく解く腹軟らん
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく

むらり解く解く解く解く
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく

くくくくくくくくく

ら物と物とよみくちれ

も物と物とよみくちれ

冬の旅心ひとのんすり物

足むえの物かこん物

冬はまじかこん物

ちもわつかにまじか

物とまじかこん物

物とまじかこん物

布子紙子綿子やまの

物とまじかこん物

物とまじかこん物

物とまじかこん物

物とまじかこん物

物とまじかこん物

物とまじかこん物

物とまじかこん物

斤相

俵

斗

升

石

石

石

石

石

石

石

石

石

石

石

貞保

貞利

政次

日

長定

未得

角

貞房

信房

政信

冬

政信

とんねんを狸孫つら此殿つと

日永

貞忠

多那のふ方も皇若朝常

小

好永

山つねのそと

是のむえんくひやき

留

易定

曆書やたはぬ小と大経脚

岸

政信

ちきり茶や好持量程好持

川口

山副

そと也^あそく^すあ^あ好^あ持^あ量^あ程^あ好^あ持^あ

村

保成

後世おむらぬ志もはなれ好持量

中

三徳

ひのふてのり^あ好^あ持^あ量^あ程^あ好^あ持^あ

中

三徳

懐妊やおくさん一此十二月

中

梅吉

其用もはるやさん一の十月

坂

貞宣

煉拂ふはりのくも十月

政辰

十月十日日蓮三三也

つゆもさきひさるんあハ傳

長龍

孫よりいんさあわあ富のほ

あ富のほ

町の津中船店に...
十二...
上戸...
神代...

歳暮

くね...
くふ...
あつ...

あつ...
あつ...
あつ...

成り...の...

いぬ...
日...
あ...
あ...

年の末もくふの村邊とて也

未済

此矢敷もく月らむ十二米

月

此から年此矢鹿の由也

倉

實のこしつ書ふ

ゆり此は山とよりのわおのこ

正忍

年乃結の系菊も冬に結中

左記

久くぬまや海との年とて也

上登

歳末也居穂田とて也

貞利

秋て也もつ餅はりの年此れ

未如

せきとらもつとて也

月

毎此れもつとて也

貞利

也孫もぬらむとて也

良徳

天の中もつとて也

利成

年より也歌の書ふも此ありと

長記

くれと年とて也

月

あひは也書も似る也

こ

ひきかへしひきかへしひきかへし

明暦二年 丙寅 庚辰 言祥目
寺町通圓福寺前町

秋田屋平左衛門板行

崑山集卷第十三 大尾

首は連歌共々教句とすう時
てはせき場と既ぬ亡父の所宗書
在世の間々教句と紙色もせき場
まへに繁葉の園白殿玄名法下
これ字此教句所あら有州行り
やうら相傳りてこゝ悉あり首の
よふもともさへし付らうし事

を我素いさまの志此貴命なりこ
ては事ハ思ひもろくはと固辭
給ひ侍り今の名聲おのふ貴人
の位ありいけ挽物くくす人ま
かと思けらいつふしるよと凶年
指合のくう御うふあぬ志とと
歎書と他つと世とみむらじ其忠集
そらる教句ととげみまは式ハ詠云
るく式ハ難のまけみ季と折せ正
折るまき事おほらと今度との内此
言ハさふ紙端から出り出
は接み入竹の折目ん落しころ句と
有つとねと折そら穂のありとと
いねの流をくまんハは号おめも

くろしほふ魚のくろしほのくろしほ
身のくろしほのくろしほのくろしほ
くろしほのくろしほのくろしほのくろしほ
くろしほのくろしほのくろしほのくろしほ
くろしほのくろしほのくろしほのくろしほ
くろしほのくろしほのくろしほのくろしほ
くろしほのくろしほのくろしほのくろしほ
くろしほのくろしほのくろしほのくろしほ
くろしほのくろしほのくろしほのくろしほ
くろしほのくろしほのくろしほのくろしほ

集とぬと六年以前おぬ思をきく侍
集とぬと六年以前おぬ思をきく侍
集とぬと六年以前おぬ思をきく侍
集とぬと六年以前おぬ思をきく侍
集とぬと六年以前おぬ思をきく侍
集とぬと六年以前おぬ思をきく侍
集とぬと六年以前おぬ思をきく侍
集とぬと六年以前おぬ思をきく侍
集とぬと六年以前おぬ思をきく侍
集とぬと六年以前おぬ思をきく侍

きてて 倭母なる尾せしる家何事ありと
 句教とくくるささおとくぬの若年
 勢方お母仕懸くろの教句も色と書
 かゝる家い後録と入るる花山集と
 八巻にけしこけきと花山ゆも玉
 名もりふあ家るしあためゆ
 是れ眼病ゆんわろり人ぬ息せと
 するゆらとつさ句ゆけしと
 明くまきさ句ふ長息をわけと家
 事とも侍とんと心えるく約連
 と今一篇ゆんと思人の字ぬと
 きより情つれ侍ふゆんゆひあ
 くとそ約連又世集お似らる作の
 教句あらんき紙撰志のあわらと

とあると人々次第万葉と初め代に
の集冊同一の作を此の作に
外も多し一おとんとてなすれ
たぬと云ふ人々にあつたらに
より多しと云ふ人々いふは
えしとも世集冊と云ふはゆつと
とぬと云ふ教をいふと云ふと
るんと佛り多らん人々いふは
書付と云ふと云ふと云ふと
と世集冊と云ふと云ふと云ふ
まらして後に此の作は似たり
けくらしんて成り遂人々
世集冊と云ふと云ふと云ふ
ともあつたりと云ふと云ふ

るんと佛り多らん人々いふは
書付と云ふと云ふと云ふと
と世集冊と云ふと云ふと云ふ
まらして後に此の作は似たり
けくらしんて成り遂人々
世集冊と云ふと云ふと云ふ
ともあつたりと云ふと云ふ

松永氏
貞德
号長頭元

三千四百八十余

原上

くあぶしとゆ

長頭元

